

# Basil Hall Chamberlainとその時代

岡墻 裕剛

## 1. 西洋人としてのChamberlain

### 1.1. 近代化と西洋化

1854年の日米和親条約によって開国した日本は、欧米から流入する大量の物品とともに、西洋人がもつ革新的な技術と知識が伝わり、学問や労働形態、生活様式や食文化に至るまで、様々な面で従来の日本文化が劇的に変化していった。

明治維新によって成立した明治政府は、このような状況を新しい国家の体制の樹立にうまく利用した。それまでの価値観を直接的に否定するのではなく、西洋から取り入れた「近代的」価値観によって間接的に上書きをすることで、幕府を中心に据えたそれまでの体制から脱却を図ったのである。この試みは成功したが、結果として、西洋的な合理化の流れが社会・経済・教育といった日本の根幹に当たる部分にまで深く浸透することになった。このような点で近代以降の日本社会の原型は当時の西洋人によって整えられたと言っても過言ではなく、明治以降の日本における急速な近代化は、いわゆる「お雇い外国人」(Foreign Employes)と呼ばれた西洋人たちの業績によるところが大きい。

1873(明治6)年来日したイギリス人であるBasil Hall Chamberlain(1850-1939)も、そのお雇い外国人の一人として日本の言語学・国語学の誕生と発展に大きく貢献したことで知られている。Chamberlainは日本に関する様々な事物を紹介する自らの著書『日本事物誌』(*Things Japanese*, 5th, 1905)において、お雇い外国人の役割の大きさに言及する。

**Foreign Employes in Japan.** Though European influence, as we have elsewhere set forth, dates back as far as A.D. 1542, it became an overwhelming force only when the country had been opened in 1854, indeed, properly speaking, only in the sixties. From that time dates the appearance in this country of a new figure, —the foreign employe ; and the foreign employe is the creator of New Japan. To the Japanese Government belongs the credit of conceiving the idea and admitting the necessity of the great change, furnishing the wherewithal, engaging the men, and profiting by their labours, resembling in this a wise patient who calls in the best available physician, and assists him by every means in his power. …

(2)

この意見が当時の外国人と日本人との間で一般的なものであったかどうかはともかくとして、西洋人のオピニオンリーダーとしての役割を担っていたChamberlainが自分たちこそが当時の日本を創設したと捉えていたことは興味深い。このように、日本における「近代化」(Modernization)は「西洋化」(Westernization)と同義であり、より先進的な文明を有していた西洋への同化を目指す動きであったと言える。

当時の日本の西洋化を表す身近な例として、同じく『日本事物誌』において日本人の「服装」に関する嘆きがあるが<sup>1</sup>、この観察以上に状況が進んでいる。現代日本人が普段身につける衣類はほぼ「洋服」であって、衣類を示す「服」という単語自体も「洋服」を指すことが一般的で、日本の伝統的なスタイルは「和服」とあえて有標で区別して表現する必要がある。普段から和服を着用する日本人はごく少数となっており、卒業式、結婚式、葬式といった特別な場面での民族衣装としてのみ使用されることが多い。これに対し、面接や入社式といったフォーマルな場面では、西洋風のスーツが重用される。つまり、服装においては日本と西洋の優位が完全に逆転し、西洋化が完了したと言える。

前掲の“as we have elsewhere set forth.”に関しては、同書の「西洋化」(Europeanisation)の項目に次の記述が確認できる。

**Europeanisation.** The Europeanisation of Japan is universally spoken of as a sudden and recent metamorphosis, dating from the opening of the country during the lifetime of men not yet old. But this implies a faulty and superficial reading of history. Europeanisation commenced over three hundred and fifty years ago, namely, in A.D. 1542, when three Portuguese adventurers discovered the Japanese island of Tane-ga-shima, and astonished the local princelet with the sight and sound of their arquebuses. …

つまり、一般に言われるように日本の西洋化が急に始まったのではなく、1542年の鉄砲伝来以降の出来事であるとの主張であり、近代以前から日本にはすでに異文化を受け入れ

---

1 **Dress.** … we speak of the native costume, which is still in fairly common use, though unfortunately no longer in universal use. The undignified billy cocks and pantaloons of the West are slowly but surely supplanting the picturesque, aristocratic-looking native garb, a change for which the Government is mainly responsible, as it obliges almost all officials to wear European dress when on duty, and of course the inferior classes ape their betters. Nor have the women, though naturally more conservative, been altogether able to resist the radicalism of their time and country. In the year 1886, some evil counsellor induced the Court to order gowns from Paris we beg pardon, from Berlin likewise corsets, and those European shoes in which a Japanese lady finds it so hard to walk without looking as if she had taken just a little drop too much. Need it be said that the Court speedily found imitators? Indeed, as a spur to the recalcitrant, a sort of notification was issued, “recommending” the adoption of European costume by the ladies of Japan.

る下地があったことを示す。

同様の現象は日本語の特徴においても確認できる。中国語から漢字を受け入れ、漢文訓読、仮名の創出といった過程を経て自国の表記システムを構築したように、日本語は中国を中心とする諸外国の言語や文化や発想を柔軟に取り入れながら成長してきたという歴史が存在するのである。

## 1.2. 西洋人による日本語研究

西洋化による日本の再生の中では、次々に新しい概念の誕生や創出、文化の再構築が行われたが、一方で様々な文化摩擦も起こった。より効率的な交流のためには、西洋人にとっても日本語や日本文化をより適正に理解する必要が生じ、多方面からの研究が進められることとなった。Chamberlainの一連の研究もそういったニーズに支えられたものであった。

西洋人による日本語研究の歴史を振り返ると、最も初期は、大航海時代に東アジアにまで到達したキリスト教宣教師たちの手によるものであった。これは、Chamberlainが指摘する西洋化の始まった時期と一致する。

この時期の日本語研究としては、Joao Rodrigues(1561-1634)の『日本大文典』*The Grand Japanese Grammar*(1604-08, 葡題: *Arte da língua do Japão*)や、『日葡辞書』(1603-1604, *Japanese-Portuguese Vocabulary*, 葡題: *Vocabulário da língua do Japão*)といった、いわゆるキリシタン資料と呼ばれる文献がある。しかし、この萌芽は日本では花開くことなく、キリスト教禁教令の影響により研究は停滞し、日本から他のアジアの地へと追放された宣教師の流れをくむ人々の間で続けられた。その大きな成果としては、1830年にバタビヤで刊行されたWalter Henry Medhurstの*English and Japanese and Japanese and English vocabulary* といった辞書類が挙げられる。その他、ロシア・オランダ・フランスなどでも東洋文化理解の一環として、日本語研究が細々と行われた。

開国によって迎えた幕末以降になると、日本国内においても本格的な西洋人の日本研究・日本語研究が再開された。本格的な研究が始まり、宣教師であり医者でもあるJames Curtis Hepburn(1815-1911、日本ではヘボンとし有名)によって日本初の和英辞典である『和英語林集成』(*A Japanese and English Dictionary, with an English and Japanese Index*. 後に*A Japanese-English and English-Japanese Dictionary*)が1867年に出版された。この辞書は好評を博したことで版を重ね、中でも大幅な増補改訂が行われた1887年の第三版は現在の日本でも使用されているヘボン式ローマ字へ繋がることになる。この著作は、森岡健二(1991)により前出Medhurst(1830)の影響が指摘されており、日本国外での日本語研究の成果が断絶したわけではないことが分かる。ここに至って日本語研究が再び西洋人の手によって日本国内で本格的に実行されることになったのである。

(4)

国内での日本・日本語研究は徐々に軌道に乗り、1872年には横浜でThe Asiatic Society of Japan(「日本アジア協会」)が設立されることになる。西洋人はここを交流の場として積極的に研究成果を発表・共有し、それぞれの日本に対する知見と理解とを深めていった。発足当時のこの会を支えたのは、会長を歴任したHepburnやSamuel Robbins Brown(1810-1880)を代表とする宣教師たちであったが、続いては外交官たちの活動も目立ち始める。特にイギリスの外交官であったWilliam George Aston(1841-1911)とSir Ernest Mason Satow(1843-1929)は、現在ではChamberlainとともに19世紀における3大日本研究者として高い評価を受けている。英国人外交官による日本語研究の発展は、駐日英国公使であるSir Harry Smith Parkes(1828-1885)が部下の外交官に対して奨励をした結果であった。当時の関係者の手記によると、外交官の実務は午前中で終わり午後からは日本語研究が行われていたとも、月曜日以外はすべて日本語学習の時間だったともされる。

外交官たちの活躍に続き、お雇い外国人、あるいは「私雇い外国人」といった個人レベルでの研究も勢いを増してくる。先述のChamberlainの意見のように、お雇い外国人はあらゆる分野で日本の新生に活躍した。その中でも日本語・日本文化の研究とその成果の海外への発信において著名なのはやはりChamberlainとPatrick Lafcadio Hearn(1850-1904、日本名：小泉八雲)である。ともに自分の意思で来日し、先人達との交流の中で日本への理解を深め、後に帝国大学(東京帝国大学)において日本人に対して教鞭を執ることになった人物である。ChamberlainとHearnとの関係については先行研究でも言及が多く、本稿でも後述したい。

西洋人たちによる日本研究はこの後も進められるが、明治の後半辺りから徐々にその中心は日本人たちに移り始め、明治時代が終わり大正時代が始まる頃にはこの流れは決定的になった。それとともに、一時期は数千を数えたお雇い外国人たちも次第に冷遇されるようになり、少しずつ日本から離れていった。帝国大学について見ても、教授言語として日本語の使用が多くなり、1897年にはChamberlainの教え子である上田萬年が帝国大学文科大学に国語研究室を開き、1903年にはHearnの後を継いで夏目漱石が講師になるなど、日本化の流れを見て取れる。

つまり、西洋人による日本語研究は、大きくは次の3期に分けて考えることができる。近世から近代初期の宣教師を中心とする時代、次いで明治前期の外交官を中心とする時代、その後の個人時代である。次章ではこの第3期において、Chamberlainが果たした役割を考えたい。

## 2. Chamberlainを巡る人と学問のつながり

### 2.1. Chamberlainの経歴

Basil Hall Chamberlainという人物を知るために、まずはその著作や、楠家重敏(1986)、

太田雄三(1990)、山口栄鉄(2009)などの先行研究を参照しその略歴を紹介する。

Chamberlainは、1850(嘉永3)年10月18日、イギリスのポーツマス郊外のサウスシーで、William Charles Chamberlain(1818-1878)の長男として生まれる。父はイギリス海軍中將の地位にまで就いた人物であり、母方の祖父Basil Hall(1788-1844)も海軍將校であるとともに、琉球と朝鮮について記述した最初の西洋人とされる。この外祖父のフルネームは、そのままChamberlain自身の名前にも使用されている。また、二人いる弟のうちHouston Stewart Chamberlain(1855-1927)は、*The Foundations of the Nineteenth Century*(1899, 独題: *Die Grundlagen des neunzehnten Jahrhunderts*)を記し、後にはナチズムに多大な影響力を及ぼしたことで知られている。

Chamberlainは幼くして母親を亡くし、フランスのベルサイユに住む祖母の元へ引き取られ、この頃に英語・フランス語・ドイツ語の三ヶ国語を学習した。オックスフォード大学進学を望むも、諸事情で世界最古の商業銀行であるイギリスの銀行に就職する。しかし、健康上の理由から退職し、イタリアやギリシアなどを漫遊した後、1873(明治6)年5月に来日した。太田(1990)によると、来日後には英国公使館に滞在し、ParksやAston、Satowらとの知己を得たという。

来日後のChamberlainはまず、士族の荒木蕃(しげる)の下で私雇外国人として英学(英語)を教え始めた。翌年に荒木との契約を解約し、9月1日より海軍兵学校で英学教師として勤務した。当時の日本の海軍はイギリスの制度を参考にしており、必然的にイギリス人がお雇い外国人として多数採用されたのであった。その後、英語以外の教科も教えるようになり、1885年までに6度契約を繰り返した。この間にChamberlainは日本語とその周辺言語への研究を本格的に始め、その成果を精力的に発表・出版する。特に*A Translation of the "Ko-ji-ki" or "Records of Ancient Matters"*(1883)は外国人だけでなく、日本人の研究者にも高く評価された。1886年4月、当時の文部大臣森有礼や帝国大学文科大学長外山正一らの推薦によって、Chamberlainは帝国大学文科大学の発足と同時に博言学科(言語学)および和文学科(国語学)の初代教師に就任する。

帝国大学時代の教え子には、上田萬年と岡倉由三郎、芳賀矢一など、後に学者として大成するものが多くいた。学生の中には外国人から日本文法を学ぶことに反発するものもいたが、Chamberlainの西洋式の本格的な研究法は当時の日本式の教授法よりも遙かに高度であったとの評価がある。岡倉由三郎(1935)はその講義について、同講座教授の物集高見と比較し、「日本語の、言語系統中の位置やら、その姉妹語と視られる他の國語との構造の異同等を、考に入れての説述であつたから」「著く清新の感が深かつた」と述べる。

Chamberlainは1890年に教職を退いたが、翌年3月7日には外国人として初の帝国大学名誉教師となり、以後英欧日間を往復し日本文化を世界に広めるのに多大な貢献をした。対外的には、鋭い観察眼で日本の事物について言及した*Things Japanese*(1890)が特に有名で

(6)

ある。この本は第6版まで改訂出版され、仏訳版も存在する。このような業績が認められ、1911年3月の最終的な離日の数日前に、勲三等瑞宝章が授与された。

日本を去ったChamberlainは、スイスのジュネーブに居を構え、そこでも広く日本文学の訳出を行い、日本文化についての研究を「日本アジア協会」や「ロンドン日本協会」(The Japan Society)などで発表した。この時期のChamberlainはフランス詩文の研究に尽力し、フランス語の選詩集である*Huit Siècles de poésie française* (1927)を発行している。Chamberlainはその後も創作活動を続けたが、1935(昭和10)年2月15日、ジュネーブのリッチモンドホテルで死去した。

書き下ろしによるChamberlainの最後の著作は、彼の人生哲学ともいべき教訓をまとめた随想録*Encore est vive la Souris* (1933)であった。この著書は、彼が老齢な為にイギリスの新聞が誤って名前に‘Late’の文字を付したことに對する不満から書かれたものであった。そして、その死から4年経った1939年に、彼が生前加筆を加えた原稿を元に*Things Japanese*の第6版が発行され、このライフワークとも言うべき著書が遺作となった。

Chamberlainは死後にジュネーブに埋葬されたが、楠家(1986)ではその墓所を調査したが痕跡をいっさい発見できなかったことが報告されている。また、横浜開港資料館編(2014)によると約10年間居住していた戸田家の青山墓地にある墓所には自作の「萩分くと迷ひいぬけん老人の影さえみへぬ野辺の朝露 王堂」という短歌が、山口(2010)によると宮ノ下時代に懇意にしていた老人の墓には「英国人ピー・エッチ・チャンブレン従者 斉藤吉之助」との墓碑銘が、それぞれ存在するとの指摘がある。しかし、稿者による調査では、移築されたのか撤去されたのか、現在はどちらの墓石も確認できなかった。

## 2.2. Chamberlainを取り巻く人物たち

日本・日本語研究という立場から見ると、Chamberlainの最初期の著述は1876年にイギリスのCornhill Magazineに発表した*Jitu-go-Kiyo : the teaching of the words of truth*と*The death-stone : a lyric drama from the Japanese*という英訳であった。日本国内でのものとしては、The Asiatic Societyに1877年に発表した*On the use of "Pillow-words" and "Plays upon words" in Japanese poetry*であった。来日からわずか3年にして、日本語と日本文化についての理解を深められたのは、幼少からの多言語教育による語学の才能に裏付けられたものであると同時に、Chamberlainが交流した日本人と西洋人たちの両方からのバックアップがあったためであると考えられる。

この時期の逸話として、楠家(1986)は、1875年9月の『朝野新聞』のChamberlainの元雇用主の荒木からの投書を紹介する。そこには、Chamberlainが「王堂」という雅号を用いて和歌を作成していたことが示されている。Chamberlainは詩歌に関する興味が深く、来日後の早い段階から荒木や鈴木庸正(つねまさ)などから「古今和歌集」や「万葉集」、

「枕草子」といった日本古典の基礎知識や和歌を学んでいたのであった。この詩歌についての知識に基づき、1880年には早くも、日本の和歌・謡曲・狂言について解説した*The Classical Poetry of the Japanese*を発表した。この中では、Chamberlainは、同年に国歌となった「君が代」の出典である「古今和歌集」の短歌の翻訳を行っている<sup>2</sup>。

このようにChamberlainは最も早くに和歌や俳句を翻訳した西洋人の一人として知られるが、それ先だつSatowも能に造形が深く、謡曲の収集を行っていた。Satowは離日の際にその謡曲コレクションをChamberlainへと譲り、さらにChamberlainも離日に際して今度は歌人であった佐佐木信綱に譲っている。佐佐木はこれらの珍本を、新たに『新謡曲百番』として1912年に出版した。そして、その序文はChamberlain自身から寄せられたものであり、上記のような来歴が記されている。つまり、これらの謡本は西洋人であるSatowが日本で収集したものがChamberlainの手を経て再び日本人である佐佐木信綱へと寄贈されたという複雑な経緯を辿ったことになる。

佐佐木は、Chamberlainの帝大時代の教え子である上田萬年の教え子であるため、孫弟子にあたる存在で、没後の1935年の追悼講演会において中心的な役割を果たしたほどの人物であったが、初対面は学術的なシーンではなく、1902年富士屋ホテルでのプライベートの場であった。佐佐木信綱(1959)に当時の様子が詳しく書かれているが、ホテルでの対面の後、ホテルの脇にあった蔵書倉(王堂文庫)に誘われたのをきっかけに、Chamberlainの薫陶を受けることになったという。

Satowとの話に戻ると、両者はChamberlainの来日後早い段階で出会い、その後公私ともに交流をもつ。日本研究の面ではSatowの1881年の著書*A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* について、Chamberlainがその後を継いで1891年に3rd editionとして*A Handbook for Travellers in Japan*を発行した。また、二人の間でやりとりされた書簡は現在も多数残されており、会食やピアノの連弾を行ったとの記録もある。楠家(2007)は、自身が入手したChamberlain旧蔵本であったSatowの著書*A Diplomat in Japan* (1921)に、Satowからの書簡4通が挟みこまれており、そこで同書についての意見を交わされていたことを紹介する。Chamberlainは生涯を通して、多くの人物と書簡のやりとりをおこなっているが、この活動を通して、日常的に日本文化への理解を深めていたと言える。

もう一人、Chamberlainとの書簡のやりとりで有名なのはHearnである。彼らは同年の1850年生まれであったが、来日はChamberlainの方が17年早い。一説では、1890年のHearn来日の際に、すでに日本研究で名が知られていたChamberlainに対し、面識がなかったに

2 わがきみは千世にやちよにさざれいしのいはとなりてこけのむすまで

A thousand years of happy life be thine!  
Live on, my Lord, till what are pebbles now,  
By age united, to great rocks shall grow,  
Whose venerable sides the moss doth line!

(8)

も関わらず書状により職を求めたことにより二人の交流が始まったとされる。両者の交流については、先行研究で取り扱われており広く知られているが、書簡は*Letters from Basil Hall Chamberlain to Lafcadio Hearn* (1936)や、*More letters from Basil Hall Chamberlain to Lafcadio Hearn and letters from M. Toyama, Y. Tsubouchi and others* (1937)などとして刊行されている。その内容からは、正反対とも言える両者の考え方や立場の違いが読み取れる。例えば、ローマ字論者であったChamberlainと、表意文字について肯定的な立場をとったHearnとのやりとりは、興味深い内容である。1880年代のChamberlainは積極的にローマ字会に関わっていたが、その運動は1892年頃には頓挫した。後に1899年の『文字のしるべ』で、Chamberlainの日本語の文字への理解はローマ字論から漢字存続を肯定する立場へと転換するが、ローマ字会の失敗のみならず、このようなHearnからの影響もあったのではないだろうか。この書簡のやりとりは後年途絶え、Hearnの死後にはChamberlainによるHearnの評価が急変したことが平川祐弘(1987)などで指摘されているが、そもそも両者には生前から大きな相違があったのであろう。

両者の日本への知識はともかく、その日本語能力については、Hearnは発話・筆記ともに決して高度なものではなかったとされている<sup>3</sup>。一方Chamberlainについては、当時を知る関係者の手記(佐佐木信綱編1948や佐佐木信綱1959)などで流暢な日本語を話していたことが証言されている。『日本小文典』(1887)の雅文の序文を、多くの学者がChamberlain自身によるものと錯誤したことも、彼の日本語運用能力に対する対外的な評価の高さを示すと言える。

しかし、語学力は高かったがChamberlainは視力が良くなかったために、文章の朗読と執筆のための秘書を常に雇用していた。帝国大生を朗読のアルバイトとして雇うことも多かったらしく、作家の上田敏もその時の感想を記している。日本人秘書としては大野義智、永原栄一、杉浦藤四郎といった人物がおり、日本を離れていた時期である1908年以降はフランス人秘書Charles Bolard-Talbèreを雇用している。この中でも、杉浦とBolardへの信頼は厚かった。

Chamberlainは杉浦と1905年に出会い、自身が断念したオックスフォード大学への進学を精神的・金銭的に後押しするなど親身に世話を焼いた。相原由美子(1973)や太田(1990)では、杉浦への書簡の中の“exactly as if you were my own son”という表現や、Chamberlainの友人から杉浦が“Basil Junior”と呼ばれることがあったことを紹介されてお

---

3 「ヘルンについての一不思議は、あれほど広く多方面の文學に互つて、日本人以上に日本のことを知つて居ながら、日本語を殆んど知らなかつたといふことである。彼の知つた日本文字は、片假名のイロハと僅少の漢字にすぎず、彼の語る日本語は、焼津からの手紙にある通り、不思議な文法によつて獨創された、子供の片言のやうな日本語である。」萩原朔太郎(1941)

「日本語は家族の間で意思疎通ができればよいということで、英語直訳式の日本語を使っており…家族の間ではこの変な日本語を「ヘルン語」とか「ヘルン言葉」と申しておりました。」小泉時(2005)



り、単なる師弟を超えた両者の深い関係が窺える。

一方のBolardは秘書以外にも日常の雑務を引き受け、1935年の臨終にまでChamberlainに付き添った。Chamberlainの最後の日本滞在の際にも付き添って来日し、富士屋ホテルの1910年12月27日付けレジスターブックにはChamberlainとBolardの直筆サインが並んで残されている。

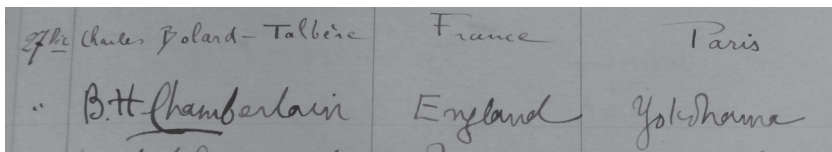


図1 Chamberlainのサイン

同じく太田(1990)によると、やはりChamberlainはBolardを我が子のように思っており、最期の土地にスイスを選んだのも彼がフランス語しか十分に話せなかったことを考慮してのことであったとする。事実、Chamberlainが杉浦に宛てた書簡の中で、フランス語しか話せないBolardに英語を教えたことや、詩の解釈を説いたこと、あるいは日本語の習得には時間と労力がかかるためにあえて学習する必要が無いと指示したことなどが記されており、やはり単なる秘書に対するもの以上の配慮を見ることができる。

### 2.3. Chamberlainの旧蔵本

前節でも触れたが、Chamberlainの旧蔵書は、「英王堂蔵書」という印によって確認できる。Chamberlainの雅号である「王堂」は、Satowの「薩道」、Astonの「阿須頓」といった音訳とは異なり、Basil=王(Ö)、Hall=堂(Dô)とした意味による和訳である。祖父から受け継いだこの名前に深い愛着があったことが窺えるのと同時に、より本質と実用(practical)を重視するChamberlainの理屈臭い性格を感じることができる。

蔵書印について調査すると、天理図書館蔵の『弄錢奇鑒』には「英國薩道蔵書」と「英王堂蔵書」の印記が、同館の『唐泊孫七漂海話』には、「英国阿須頓蔵書」と「英王堂蔵書」の印記が同じページに押印されていた。これらの文献は、佐佐木信綱の旧蔵本リストである『竹柏園蔵書志』(1939)に掲載されているため、それぞれSatowとAstonからChamberlainへと寄贈され、さらに佐佐木へと受け継がれたものであることが分かる。

Chamberlainを中心としたSatow、Astonの旧蔵本については、楠家(1986)に詳細な情報があるが、それに先だって反町茂雄(1984)による言及が存在する。両書によると、Satowの旧蔵本は国外では大英図書館、国内では日本大学文理学部図書館、京都大学附属図書館などがあり、Astonのものはケンブリッジ大学総合図書館に9500冊の和書が所蔵さ

れている。後者のコレクションの中には、SatowがChamberlainに寄贈した蔵書のリストが存在しており、西洋人同士の蔵書の授受を通じた知の伝播の動態を見ることができる。

Chamberlain自身の蔵書としては、雅号に基づく「王堂文庫」と、その前身であった「赤坂文庫」とがあったが、前者の方が名が知られている。「王堂文庫」という名称は、蔵書コレクション全体を指すとともに、狭義には箱根宮ノ下の富士屋ホテルに設置された蔵書倉の呼称としても使用された。Chamberlainは横浜の横浜ユナイテッドクラブやゼネバホテル、富士屋ホテルなどに滞在することが多く、中でも富士屋ホテルは1884年からの常宿であった。1894年にはホテルのオーナーであった山口仙之助に許可をもらい、敷地内の熊野神社の傍に蔵書倉を建てた。Chamberlainはここに自らの蔵書を運び入れて「王堂文庫」と名付けたのである。

王堂文庫に保管されていた和書類は、1911年のChamberlainの最終的な離日に際して、佐佐木を中心に、上田万年との相談を得て、分与されることになった。前述のChamberlainの序文を付した『新謡曲百番』もこのような経緯を経たものである。上田万年への授与分は、1935年に上田の他の蔵書とともに日本大学へ寄贈され、上田文庫と呼ばれることになった。

反町(1984)によれば、王堂文庫の日本古典籍の行方は3つに分かれており、佐佐木信綱、上田万年に加え、「秘書の日本人某氏」の手へと渡り、佐佐木分は後に戦時中の難を逃れて天理図書館に購入・所蔵されることになったが、残りのものはもろもろの事情で散逸していったとされる。現在でも時折、古書店で「英王堂蔵書の印記」などと注記された出品を確認でき、日本全国に散らばったChamberlainコレクションの名残を感じることができる。

「秘書の日本人某氏」に関しては、当時重用していたのは永原英一と杉浦藤四郎であり、杉浦は留学中の時期に当たるため永原がその第一候補となるが、特定には至っていない。

主去りし後も王堂文庫の建物自体は残されていたが、1945年に火災により焼失し、現在では草木の間に記念碑が残されるのみで、懇意にしていた嶋写真館、富士屋ホテルなどに王堂文庫の元蔵書が数冊存在するのが当時の残滓である。愛知教育大学附属図書館編(1992)には、当時の「王堂文庫」の写真とともに、Chamberlainとそれを取り巻く富士屋ホテルの人々の様子が記録されている。

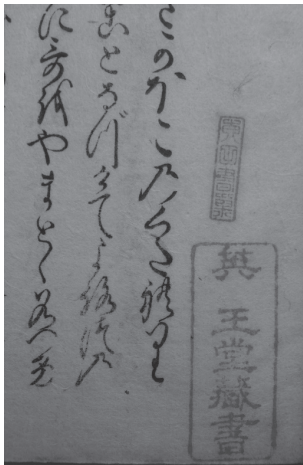


図2 「英王堂蔵書」印  
(『七十一番歌合』著者蔵本)

さて、もう一つの「赤坂文庫」は「王堂文庫」設立以前のコレクションを指し、時系列的には前後するが、Chamberlainが1889年から1899年頃にかけて約10年間、東京の赤坂台町一九番地の戸田家に居住していたことがその名の由来である。天理図書館には、『赤坂文庫書目土代』4冊と『赤坂文庫書目分類底稿』5冊が所蔵されており、このコレクションの詳細を知ることができる。この2つの目録は、盲目の国学者として有名な埴保己一の孫である埴忠韶(ただつぐ)が、Chamberlainの依頼をうけてその蔵書を整理し自筆でまとめあげたものである。著者の調査では、『土代』の巻頭に忠韶の名と「廿七年十二月」(明治27年=1894年)の文字が確認できた。また、『底稿』には「寶玲文庫」というFrank Hawley(1906-1961)の印記が見られた。

楠家(1986)によると、『土代』には18000冊を超える蔵書が記されており、「彼が自分の息子のように可愛がった日本人の杉浦藤四郎の許にわたり、これを昭和三〇年代に天理大学図書館が購入」したもので、『底稿』はその控えであったとの見解を示す。一方、反町(1984)によれば、『土代』は佐佐木の竹柏園文庫から天理図書館へ伝わったもので、『底稿』は古書肆である著者が1940年代に上田文庫から獲て一度ホーレーに販売したが再度入手して昭和35年(1960)に他の蔵書目録とともに天理図書館へと寄贈したものとす。控えである『底稿』は上田萬年への分与分であるようだが、『土代』に関しては両者の記述が異なる。これが「赤坂文庫」の正式な目録であるならば、その譲渡は単なる一冊の本の受け渡し以上の意味をもつため、この問題について少し掘り下げて推測したい。

両者について整理すると、佐佐木が1872年生まれ、杉浦が1883年生まれ、Chamberlainとの出会いは佐佐木が1902年、杉浦が1905年とされる。佐佐木の方が年長であり、かつChamberlainとの交友も長い。当時のChamberlainとの関係性から見ると、佐佐木は日本の詩歌についての学術的な交流をもち、杉浦はChamberlainの渡欧に付き添うなど親密な間柄であったが、どちらかというそれは後見人のような関係であった。王堂文庫の蔵書処分の際には、佐佐木が中心的な役割を果たしたが、一方の杉浦は、当時英国に留学中であつた。このように両者は立場も所在地も大きく隔たっていたのである。『土代』と『底稿』といういわば主本と副本の2冊1セットが存在し、その片方を上田萬年が授与されたことを合わせると、『土代』はまずは佐佐木の手へ渡ったと考えるのが自然だろう。

一方で国内に残された和書以外の蔵書に関して、杉浦は1920年にスイスでChamberlainと面会した際に主に英文の蔵書約1000冊を譲り受けている。杉浦は、これらの大量の蔵書とともに、27年にわたるChamberlainやその関係者との間での書簡を愛知教育大学に寄贈し、これが現在では「チェンバレン・杉浦文庫」として保存されている。太田や楠家が利用したように、これらの書簡類や蔵書への自筆の書き込みは、当時の関係者の動向や関係性、思考プロセスを知る上で重要な資料である。また、Chamberlainが所有していた多大な日本語資料・史料から、その熱意をうかがい知ることができるとともに、その後の蔵書

(12)

の流れに注目することで知の伝播と共有の過程を確認できる。

### 3. まとめにかえて

前章までに見てきたように、Chamberlainは交友関係が広く、周囲の人間の学術的な成長に大きな喜びを見いだす人物であったようだ。前代の西洋人による学術の成果を受け継いだChamberlainの遺志は、大きく二つの方面へと引き継がれる。上田・佐佐木といった教え子を中心とする学術的なコミュニティと、杉浦・Bolardなど精神的かつ実務的な関係からなるいわゆる「チェンバレンファミリー」である。特に前者との関係を通して、日本研究や日本語学と行った分野がその後発展していったことは揺るぎない事実であろう。

一方で係累という点では、友人であるSatowとHearnは日本人女性との間に子を設けているが、Chamberlain自身は生涯独身で子どもがいなかったとされる。後進たちに対する惜しめない愛情・恩情は、実子をもたないChamberlainの心情の表れなのかもしれない。代表作*Things Japanese*には、“children”という単語が実に100回を超えて出現するのであった。

### 参考文献

1. 愛知教育大学附属図書館編(1992)『チェンバレン・杉浦文庫書簡目録』
2. 相原由美子(1973)「バジル・ホール・チェンバレン」、昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第三十八巻
3. 太田雄三(1990)『シリーズ民間日本学者24 B・H・チェンバレン 日欧間の往復運動に生きた世界人』、リプロポート
4. 岡倉由三郎(1935)「チャムブレン先生を憶ふ」、東京大學國語國文學會『國語と國文学』第十二巻四号
5. 楠家重敏(1986)『東西交流叢書2 ネズミはまだ生きている』、雄松堂出版
6. 楠家重敏(1998)『イギリス人ジャパノロジストの肖像』、日本図書刊行会
7. 楠家重敏(2007)「日欧交渉史エッセイ」、『Net Pinus』72号(オンライン雑誌<http://myrp.maruzen.co.jp/twb/netpinus/> 現在公開停止中)
8. 小泉時(2005)「身内から見た小泉八雲」、『異文化研究』2
9. 佐佐木信綱(1939)『竹柏園蔵書志』、巖松堂書店
10. 佐佐木信綱編(1948)『王堂チェンバレン先生』、好學社
11. 佐佐木信綱(1959)『作歌八十二年』、毎日新聞社

---

4 楠家(2005)は、外務省外交史料館所蔵「外国人土地家屋営業関係一覧表(明治二五年)」を根拠に、「チェンバレンは和歌仲間の戸田キン〔雅号つや子〕を内縁の妻とし、彼女の名義で赤坂・台町の土地と家屋を購入している」とする。

12. 反町茂雄(1984)『冤書家・業界・業界人』、八木書店
13. 萩原朔太郎(1941)「小泉八雲の家庭生活」、(底本『萩原朔太郎全集』(1977)第11卷, 筑摩書房)
14. 平川祐弘(1987)『破られた友情 ハーンとチェンバレンの日本理解』、新潮社
15. 森岡健二(1991)『改訂近代語の成立 語彙編』、明治書院
16. 山口栄鉄(2010)『英人日本学者チェンバレンの研究 〈欧文日本学〉より観た再評価』、沖積舎
17. 横浜開港資料館編(2014)「開港のひろば」第126号、<http://www.kaikou.city.yokohama.jp/journal/126/02-2.html>